〔共同研究〕

『類雑集』の出典　その（2）―「一角仙人」説話を手がかりに―

近世唱導文芸研究会

一、はじめに

近世唱導文芸研究会では、大正大学図書館に所蔵される近世の唱導資料を研究対象としている。近年は、大正大学図書館蔵『類雑集』を研究対象として、出典研究を進めている（注1）。前号の中間報告では、『類雑集』巻八に引用された「術婆伽説話」に焦点をしぼり考察をした。その成果を簡潔に述べると、「術婆伽説話」関連の先行研究を確認した上で、同説話の出典である『大智度論』をはじめとする仏教の典籍類や説話類と、『類雑集』本文の比較検討を行ない、「術婆伽説話」が、平安時代から室町時代にかけて、さまざまな生成と展開を見せることを確認した。また中間報告の時点ではまとめられなかった点は、別稿に記したので参照されたい（注2）。

いま、「術婆伽説話」を一言でまとめるなら、「身分違いの悲恋」と言えよう。そうした「恋」の話題を編者がどのように受け止め、作品のなかで記していくのかについては、各作品の編者の視点によって大きく異なる。今回筆者は、「術婆伽説話」を考察する際に、多くの作品に「一角仙人」の話が共通

して収載されている事実に着目し、その背景について考察してみたいと考えた。

そこで、本稿では「一角仙人」の先行研究を確認しながら、前号と同様、経典、注釈書、説話、和歌、能へとおおきな広がりをみせる本説話と、『類雑集』の「一角仙人譚」の本文の比較検討を行ないたい。

なお、本稿は、近世唱導文芸研究会メンバーの大正大学名誉教授大場朗先生、北林茉莉代氏にご助言いただき、研究会を代表して、平間尚子が執筆を行なった。論述の都合上、第三章のみ小見出しをつけた。

二、『類雑集』の一角仙人譚と一角仙人の先行研究

はじめに、『類雑集』の概要を説明したい。版本は二種あり、それぞれ「慶安四年〈辛卯〉暦十月吉辰　石黒庄太夫板本」、「明暦三年〈丁酉〉三月吉辰　秋田屋平左衛門板行」の刊記を有するものである。どちらも、全十巻十冊と総目録一冊の計十一冊で、同一の版木を用いて刷られている。『類雑集』の内容と特徴について、牧野和夫氏は、

・十巻を門別に分かち、各門、「事」書にて項目を立て、諸書より引文を以て当てる。即ち、門別分類した要文集・要語集という性格をもつ。実用書の常として、諸書よりの抜抄に基づくもので、その引書は、天台三大部とその注釈書、「法苑珠林」等が主体をなしているが、外典・俗書の活用も認められる。

・平安時代から室町時代末期近世初頭頃に到る各時代の成立の幅広い引書（孫引き等も考慮しなければならない）に基づく輯成である。

・注目すべきことは、主に小字双行の割注形式を以て示された「法華題目抄」「開目抄」「録外曾谷抄」「知謗法論」等の名であり、日蓮の著作類の引用が認められる点である。先に指摘した『類雑集』の刊・写本が日蓮宗内を中心に流伝していたと覚しい事実と符合して、『類雑集』刊行時に日蓮宗関係者が関与していたことは確実となったのである。

と指摘している（注3）。　次に、「一角仙人」の先行研究について触れておきたい。取り分け注目されるのは、前田雅之氏の報告で詳細な研究成果が発表されている（注4）。いま、一覧にするとつぎのとおりである。

・一角仙人物語の構造と展開（1）――マハーバーラタ所収話の構造――
・一角仙人物語の構造と展開（2）――仏教所収話群の諸相と構造――
・一角仙人物語の構造と展開（3）――中国世界の受容をめぐって――
・一角仙人物語の構造と展開（4）――日本における受容と表現（一）『今昔物語集』所収話の世界と言語――
・一角仙人物語の構造と展開（5）――日本における受容と表現（二）古代～中世における歌学書の受容をめぐって――
・一角仙人物語の構造と展開（6）――日本における受容と表現（三）中世における説話集・仏書の受容をめぐって――

なお本中間報告では、前田氏の先行研究に導かれながら、先学諸氏が言及しなかった『類雑集』を取り上げ、「一角仙人話」がどの作品の本文や内容に近いものであるのか、また各作品間の影響の有無について、考察を進めていきたい。なお、本稿では検討作品として『類雑集』『宝物集』『三国伝記』『太

平記』を中心に取り上げ、必要な場合は他の作品も検討の対象としたい。はじめに『類雑集』巻八の「一角仙人」説話の該当箇所を引用したい。なお、『法苑珠林』との異同を下部に示した。また『大智度論』（『大正蔵』巻二五、一八三ａ15～ｃ20）および『法苑珠林』（『大正蔵』巻五三、八二七ｃ4～八二八ｂ3）を参照した。

廿四 一角仙人事　法苑七十一〈欲蓋篇／呵欲部〉

引智度論云尓時世尊為諸比丘説本生因縁過去久遠世時波羅奈国山中有一仙人以仲秋之月於澡盤中小便見鹿麚麀合會姪心即動精流盤中麀鹿飲之即時有身月満生子形類如人唯頭有一角其足似鹿々当産時至仙人庵辺而産見子是人以付仙人而去仙人出時見此鹿子自念本縁知是巳兒取已養育及其年大勤教学問通十八種大経又学坐禅行四無量心得五神通一時上山値栗雨泥滑其足不便蹠地破其軍持又傷其足便大瞋恚以軍持盛水祝令不雨仙

」52オ

秋→法春　→法鹿麚麀

鹿々→法鹿鹿

見子是人→法是子是人

巳→法己

栗雨→法霖雨　蹠→法躄

人福徳竜鬼‐神皆為*不レ雨々レ々故五穀五
*菓尽皆不レ生人民窮乏無二復生路一波羅奈王
憂愁懊悩命二諸大寮一集二議雨事明‐者議言我
得聞仙人山中有二一角仙人一以二足不便一故上
レ山*躃レ地傷レ足瞋祝二此雨一令二十二年不一レ墮王思‐
惟言若十二年不レ雨我国了矣無二復人民一王
即開募其有下能令中仙人失二五通一属レ我為レ民上者
当下分二国半一治上是国有二姪女一名曰二扇陀一端正巨
富来応二王募一女問二諸人一此‐是人非人衆人言
是仙人所生姪‐女言若‐是人者我‐能壊レ之作二
是語一已即取二金盤一盛二好宝物一語レ王言我当下騎二
此仙人項一来上姪女即時*五百乗車載二五百美
女一五百鹿‐車載二*種々歓喜丸一皆以二衆薬草一和
レ之以二彩‐画一令レ似二雑果一及持二種々大力一美酒色
味如水服樹皮衣行二林樹間一以象二仙人一於二仙
人*庵辺一作二草庵一而住一角仙人*遊‐行見レ之諸
女皆出迎逆好華妙香供二養*仙人一々々大‐喜
諸女以二美言一敬‐辞問二訊仙人一将入二房中一坐二好

」52ウ

*不レ雨々レ々→㊫不雨不雨
*菓→㊫果

*躃→㊫躄

*五百乗車→㊫求五百乗車
*種々→㊫種種

*庵→㊫菴　*遊→㊫游
*仙人々々→㊫仙人仙人

*牀褥一与二好淨酒一以二為淨水一与二歡喜丸一以為二菓
蔬一食飲飽一已語二諸女一言我從レ生已来初未レ得二
如レ此好果好水一諸女言我一心行レ善故天与
レ我願得二此好水好果一仙人問二諸女一言汝以レ何
故膚色肥盛答言我曹食二此好果一飲二此美水一
故肥如レ此女白二仙人一言汝一何以不下在二此間一住上
答曰亦可レ住耳女言可二共澡洗一即亦可レ之女
手柔軟触レ之心動便与二諸一女一更互相一洗欲心
転一生遂成二婬事一即失二神通一天為大一雨七日七
夜令レ得二*歓喜一飲食七日以一後酒食皆一尽継以二
山水木果一其味不レ美更索二前者一答一言已尽今
当二共行一去レ此不レ遠有二可レ得処一仙人言隨レ意即一
便共出去レ城不レ遠女便在二道中一臥言我極不
レ能二復行一仙人言汝不レ能レ行者騎二我項上一当二擔
レ汝去一女先遣レ信白レ*王々可レ観二我智能一王勅厳一
駕出而観レ之問言何由得レ尓女白レ王言我
以二方便力一故今一已如レ此仙人無レ所二復能一令レ住二
城中一好供二養恭三敬之一足二吾所欲一拝為二大臣一住
レ城少日身一転羸一痩念二禅定心一楽厭二世欲一王問二

*牀→法床

*歓喜→法歡樂

*王々→法王王

仙人一汝何不レ楽身転、羸痩仙人答レ王我雖レ得二
五欲一常自憶二念林間閑静諸仙游処一不レ能レ得
レ去王自思一惟若能強違二其志一為レ苦々極テ則死ン
本以レ求レ除二旱患一今一已得レ之当シ二復何縁強奪二其ノ
志一即発二遣之一既還二山中一精進不レ久還得二五通一
佛告二諸比丘一其一角仙人者即我一身是也其ノ
姪女者今耶輸陀羅是尓時以二歓喜丸一惑レ我
我未断レ結為レ之所レ惑今一復欲下以二*歓喜丸一惑上我
不レ可レ得也以二是事一故知細一軟触一法能動二仙人一
何況愚夫

*歓喜丸→法薬歓喜丸

以上が、『類雑集』所載の一角仙人譚である。いま試みに『類雑集』の本説話の書き下しを掲載し、他の一角仙人説話との比較検討の参考にしたい。なお、書き下しにあたり、意味不通となる箇所は、『国訳一切経　大智度論』で補い、丸カッコ（　　）にその異同を示した。また、補う文字は亀甲括弧〔　　〕に入れて区別した。

廿四 一角仙人事　法苑珠林七十一

智度論を引〔き〕て云〔わく〕、爾の時に、世尊、諸の比丘の為に、本生の因縁を説き〔たまふ〕、

過去久遠世の時、波羅奈国の山の中に一〔人〕の仙人有り。

仲秋の月を以て、澡盤の中に於いて小便するに、鹿の□麀の合会するを見て、淫心即ち動き、精を盤中に流す。麀鹿之を飲んで、即時に身む（国訳：娠む）有り。月満ちて、子を生むに、形類人のごとく、唯、頭に一角有り、その足は鹿に似たり。鹿は、当に産まんとする時、仙人の庵の辺りに至りて産めり。子〔を〕見〔るに〕、これ人〔なり〕、以て仙人を付して去る。仙人〔は〕出づる時、この鹿の子を見るより、本縁を念じ、これ已が兒なると知りてか、取って已に養育す。その年、大なるに及んで、学問を勤教し、十八種の大経に通じ〔る〕。

又、坐禅を学び、四無量心を行じて、五神通を得る。一時（あるとき）、山に上って、栗雨（国訳：大雨）に値ふ。泥滑らかにして、その足、便ならずして、地〔面〕に躃きてその軍持（国訳：鍮持）を破り、又、その足を傷け、便ち大いに、瞋恚し、軍持（国訳：鍮持）を以て水を盛り、祝いて（国訳：呪して）、雨ふらざらしむ。仙人の福徳もて、諸竜鬼神も、皆為に雨ふらさず、雨ふらさざるが故に、五穀五菓尽く、皆生きず。人民は窮乏して復た生路なし。波羅奈〔国〕王は、憂愁懊悩し、諸の大寮（国訳：大臣）に命じ集って雨の事を議せしむ。明者議して言く、「我得る（国訳：伝え）聞く、仙人山中に一角仙人あり、足便ならざるを以ての故に山に上って地に躃き足を傷め、瞋って此雨を祝いて（国訳：呪し）、十二年堕ちざらしむ」と。王、思惟して言く、「若し十二年雨ふらずんば、我が国は了か、復た人民なけん」と。王即ち募（国訳：慕）を開き「其の能く仙人をして五通を失はしむるありて、我に属して民の為〔にする〕者には、当に国の半を分ち（国訳：興へて）治せしむべし」と。是の（国訳：波羅奈）国に婬女あり。名けて扇陀と曰ふ。端正巨富（国訳：無雙）〔なり〕。来って王の募（国訳：慕）に応ず。

女、諸人に問うて（国訳：言く）「此は是れ人か、非人か」と。衆人の言く、「是は（国訳：人のみ）、仙人の生ずる所なり」と。婬女の言く、「若し是れ人ならば、我能く之を壊せん」と。是の語を作し已つて、即ち金盤（国訳：槃）を取り、好きな宝物を盛つて王に語つて言く、「我当に此の仙人の項に騎つて来るべし」と。

婬女は即時に五百乗の車に（国訳：を求め）、五百の美女を載せ、五百の鹿車に種種の歓喜丸を載せ、皆衆の薬草を以て之に和し、彩画（国訳：衆彩）を以て（国訳：之に書きて）雑果に似せしめ、及び種種の大力の美酒を持して、色味を水の如くし、樹皮衣（国訳：草衣）を服て林樹の間を行きて、以て仙人に象り、仙人の菴の辺に［於て］草庵を作って而して住す。一角仙人、游（国訳：遊）行して之を見るに、諸女皆出でゝ迎逆し、好華、妙香（国訳：好香）を（国訳：以て）仙人に供養するに仙人は大に喜ぶ。諸女は美言敬辞を以て仙人を問訊し、将て房中に入れ、好床の褥（国訳：蓐）を坐せしめ、好きな浄酒を与（国訳：興）へて以て浄水と為し、歓喜丸を与（国訳：興）へて以て菓（国訳：果）蓏と為す。食ひ飲み飽き已つて諸女に語つて言く、「我は生まれてより已来、初より未だ此の如きの好果好水を得ず」と。諸女言く、我は一心に善を行ずるが故に、天我に（国訳：が）願くは（国訳：に）与へて、此の好水好果を得たり」と。

仙人、諸女に問ひて（国訳：言ふ）、「汝は何を以ての故に、膚色肥盛なるや」と。答へて言く、「我曹は、此の好果を食し、此の美水を飲むが故に、肥（国訳：盛なること）此の如し」と。女、仙人に白して言く、汝は何を以てか此の間に在つて住せざるや」と。答へて曰く、「亦た住す可きのみ」と。女言く「共に澡洗す可し」と。即ち亦た之を可とす。女は手を柔軟にして之に触れて心動す。便ち（復た）諸（国訳：美）女と更互に相洗ふに（国訳：ひ）、欲心転た生じ、遂に婬事を成す。即ち神通を失

ひて、天為に大雨をふらすこと七日七夜、歓喜（国訳：歓楽）して飲食を得せしめしに、七日以て（国訳：已りて）後、酒食皆尽きたり。継ぐに山水木果を以てするに、その味美ならず、更に前の者を索む。答へて言く、「已に尽きぬ（国訳：たり）、今当に共に行くべし。此を去ること遠からずして得べき処あり」と。仙人言く、「意に隨はん」と。即便ち（国訳：便ち）共に出づ。（国訳：姪女）城を去ること遠からざるを（国訳：知り）、女は便ち道中に在つて、臥して言く、「我極めて（国訳：り）、復た行くこと能はず」と。

仙人言く、「汝行くことを能はずんば、我が項の上（国訳：頂上）に騎れ、当に汝を擔て（国訳：項にして）去るべし」と。

女は先に信を遣はして王に白さく、「王〔よ〕、我が智能を観るべし」と。王は勅して駕を厳り、出でて之を観、問いて言く、「何に由ってか爾る〔こと〕を得たるや」と。女は王に白して言さく、「我は方便力を以て（国訳：の）故に、今已に此（国訳：是）の如し。仙人復た能する所なし」と。城中に住せしめて、好く之を供養し恭敬し、吾所欲（国訳：五欲）を足らしめ、拝して大臣と為す。城に住すること少日にして、身転た羸瘦し、禅定の心楽を念ひて、（国訳：此）世の欲を厭ふ。王、仙人に問ふ、「汝何んぞ楽まずして、身は転た羸瘦するや」と。

仙人、王に答ふ。「我は、五欲を得と雖も、常に自ら林間の閑静なる諸仙の游処（国訳：遊処）を憶念し（国訳：念じて心を）去るを得ること能はず」と。王自ら思惟すらく「若し（国訳：我）能く強いてその志に違はば、（国訳：志に違ふを）苦となし苦極て則ち死せん。本より旱患を除かんことを求むを以て、今は已に之を得たり、当に復たび何に縁ってか強いてその志を奪ふべし」と。即ち之を発遣す。既に山中に還りて、精進すること久しからず、還て（国訳：たびて）五通を得たり。仏、諸の比丘に告

げたまはく、「その一角仙人とは即ち我が身是なり。その婬女とは今の耶輸陀羅是なり。爾の時に歓喜丸を以て我を惑わせるに、我は未だ結を断ぜず、之が為に惑はさる所、今復た歓喜丸を以て我を惑はさんと欲すれども、得べかざるなり」と。是の事を以ての故に、細軟の触法は能く仙人を（国訳：も）動かすを知る。何に況んや、愚夫をや。

以上が、『類雑集』一角仙人説話の書き下しである。先述したとおり、本話は、仏典類では『大智度論』『法苑珠林』などにも確認できる。そこで、『類雑集』と『大智度論』の本文を比較検討すると、『類雑集』では本文の意味が通らない箇所も、『大智度論』によってその内容を知ることができる。これは、『類雑集』が、版本にする際に酷似した文字を誤読または誤植したことに起因しているといえよう。

つぎに、『類雑集』本話のくだりを簡略にまとめてみたい。

仲秋の月の時、澡盤の中に用を足した仙人が、鹿の牝牡が合会するのをみて婬心をおこした。ある時、頭に一つの角が生え、足は鹿によく似た子どもを、仙人が育てた。仙人は、鹿の子に学問をさせ、子は四無量心を行じて五神通を得たが、ある時、山中で大雨にあってつまづき、手に持っていた器を落として割ってしまい、足にけがを負った。その際に、雨をふらさないように祈った。もし十二年も雨が降らない時は国が滅び、人々が貧窮してしまうと、波羅奈国王は懊悩した。そして、国の諸大臣に相談すると、雨が降らない理由に、山にいる一角仙人の名前があがった。そこで国王は、扇陀という美女に一角仙人を誘惑するように命じた。扇陀は、五百人の美女をつれて、行列をととのえて仙人の庵に向かった。そして、美酒・肴・果物・歓喜丸を飲食させて歓待した。仙人は誘惑され、美女と婬事をなしたために神通力を失い、天は（七日七夜）大雨をふらせた。その間、飲食や飲酒をし、歓楽にふけった仙人であ

るが、食料が尽きたので、山の中にある果実を食べると味がうまくない。仙人は、女に食料をもとめると、女は、「ここから遠くないところにある」と、仙人を山中から（波羅奈国の城へ）連れ出した。仙人は女とともに王城に住み、五欲をもって大臣となった。しかし、間もなくして、仙人は国王に「常に自ら林間の閑静なる諸仙の遊処を憶いその心を消し去ることはできない」と、かつて修行していた林間の閑静な山に戻ることを願い出る。そして、再び精進した仙人は、再び五神通を得ることができた。

仏は、諸々の比丘におっしゃったことは「その一角仙人とは、私のことである。婬女とは、今の耶輸陀羅である」。その時に、歓喜丸をもちいて私を惑わせたが、私はいまだに煩悩を断つことができず、これに惑わされてしまった。しかし、いま再び薬の歓喜丸をもって私を惑わそうとしているけれども、心うごくことはない」と。このことから、細軟の触法（美女による誘惑）を用いれば、仙人さえも動かすことができることを知る。どうして、愚夫の心が動かないだろうか、いや動いてしまうだろう。

以上が、『類雑集』の一角仙人話の簡略なあらすじである。

さて、先述した前田氏の論考のなかでも、とりわけ説話集・仏書における受容と表現は、本報告において密接に関わる重要な御指摘が多くあるので、ここに氏の見解を紹介しておきたい。

前田氏は、先掲の論考「一角仙人の構造と展開（6）」で「説話集・仏書は一括して扱い、ジャンルの差異によらず、所収の一角仙人物語の形態の差異によって分析していく」と前置きした上で、ひとつの完結した物語形態をもっている所伝（完形型）と物語の一部が断片として引用されているもの（断片型）の二種類に分けている。まず、完形型とは、『三国伝記』『榻鳴暁筆』『法華経直談抄』『梵網経古迹聴書』所収話とし、その内、『榻鳴暁筆』は『三国伝記』を忠実に書写したものであるので、事実上

は三つの所伝があることを指摘している（注5）。

つぎに、断片型は、多様な異本群をもつ『宝物集』、僧伝『元亨釈書』『八幡愚童訓（甲本）』としている。本来であれば、完形型と断片型の各作品の考察を行なうべきところであるが、今回は、『類雑集』と関係が認められる『宝物集』や『三国伝記』と、『太平記』に絞って検討していきたい。

三、『宝物集』における一角仙人話

はじめに、『宝物集』諸本の一角仙人説話について、一巻本から順に取り上げ、その特徴についてまとめてみたい。

○一巻本『宝物集』（注6）なお、読解の便をはかるため、私に句読点を付した。

ナヲシ一粒之舎利ハトリタリ。東方朔ト申仙人ソラ。西王母之桃ヲハ盗メル事三度ナリ。申サムヤタヽウチアルヒトハ。多コノ事ヲオカセルナリ。白波緑林之類ハ五十人ヲカタラヒ梁上公ノヤカラハ百人ヲ友トス。仏在世ニモ。手足キ□□眼ヲ□□レシ盗人モ。五百人コソハ同シテ侍ケレ。後生マテハ申シ。現世ニテモミナヨキコトハ侍ラス。コノ世ニモ。ナラサカノカナツフテ。スヽカ山ノタチエホウシナト申物侍ケリ。ヒタカノ禅師海之羊ミナト申ケルヌスヒトヽモイツレカツヒニヨクテ侍ル。手キラレ。クヒキラレ。ヒトヤニヰテカナシキメヲノミコソハミナミル事ニテ侍メレ。

鐵ハ針ニテ、ハテ。ヒトハ盗ヲモテ、ヲヘ侍ナリ。後生ノセメヲハ、コレヲモテ思ヤリ給ヘキナリ。邪婬ト申ハ女之方ヘ、メヲタニモミヤラストソ申メル。法花経之安楽行品ニ、チカツクマシキ相ヲオシヘ給ヘルニモ、諸ノ婬女ニチカツクヘカラスト侍メル。一見於女人。永結三途業。何況□□□□堕无間業ト申□モ侍メレハ、マシテ着ヲナサム罪、イカハカリ侍ラム。雖然トコノ道ハチカラモヲヨハヌ事ニテ侍事ナリ。無始生死ヨリ。三界ニ流転スル事ハ此邪婬戒ヲ、タモタサリシカユヘナリ。春駒ノ身ヲソコナヒ秋之鹿之命ヲ失フ。婬欲ニタムラカサルヽカユヘナリ。銅ヲノム象、鐵ヲクラウ犬、ナヲシコノ道ニタウル事ナシ。何況ヒトヽ申ハカリノモノハ、シノヒカタクタヘカタキ事ニテ侍トソ承侍。一角仙人ハ、玉女□チカツキテ験ヲウシナヒ。四目之居士ハ、臣子之命ニシタカ□□□□□タリ。鳩摩羅什ハ亀茲國□玉女ニ〔以下滅失〕

○身延文庫蔵『宝物集』中巻（注7）

第三ニ、不邪婬ト申ハ、妻アル者ヲ夫ニセス、夫アル者ヲ妻ニセスト誡タル也。サレトモ、是ハ一人ヲハユルサレテ侍メレハ、事モ踈ニテ侍メル。不婬トハ、ヒトシキ女ノ方ヘ目ヲモ見遣ヘカラスト、アマタノ経ノ中ニ、制シテ侍メリ。女人ハ煩悩ノ源也。一度モ犯ツレハ、五百生ノ間、彼ニ随テ六趣ニ輪廻ス。毒蛇ヲハ見トモ、女人ヲハ見ヘカラス。

一見於女人　永結三途業　何況於一犯　定堕無間獄

誡ニ大聖ノ給ヘル事、疑ヲ成ヘカラス。昔、一人ノ羅漢、道ヲ行ニ、木ノ枝ニ鳥ノ居ケルヲ見テ、ウチ笑テ通リケレハ、弟子、怪ク思テ通ケリ。羅漢、弟子ニ語テ云、我五百世ノ間、優婆塞ト有シ時、婬ヲ行ス。自一人ノ子ヲマウケタリキ。雖然、世間ノ無常ヲ厭テ、仏道修行ノ為ニ、家ヲ出シ時、此ノ

子、六歳ニ成シカ、我ハイカニシテアレトテ、捨テハ行トテ、足ニ取付テヲメキシニ、見捨カタクテ、其ノ度ノ出家ハト丶マリニキ。故ニ、出離方便ナクシテ、五百生ノ間、六趣ニ輪廻シテ、此度コソ、カクシテ果ヲ得タレ。彼六歳ノ子ト云ハ、此鳥也トソノ給ケレ。サレハ、婬ハ種ノ如シトソ申メレ。物ノ種コソ、自大地ニ落レハ、ムラカリ茂レル草木トハナレ。婬モ又、如是。犯ツレハ、五百世ノ間ノ仏道ヲ妨ク。著ヲ成ラン罪、思遣テシリ給ヘシ。流伝生死、タ丶婬欲ニヨル也。春ノ駒ノ身ヲ壊ナヒ、秋ノ鹿ノ命ヲ失、婬欲ノタフラカス故也。銅ヲ〔飲ム〕象、鉄ヲ食犬、猶此道ニタエス。況ヤ、人ニヲイテヲヤ。一角仙人ハ、玉女ノ形ニ近付テ、シルシヲウシナヒ、四目居士ハ、臣子ノ命ニ随テ、行ヲ怠。鳩摩羅衍ハ、亀茲国ノ王女ニ縁ヲ結ヒ、羅什三蔵ハ四人ノ君ヲ儲キ。大樹仙人ハ、女ヲ見テ、定ヲ出、カサン比丘ハ優婆堀多ニハカラレ、橋尸迦梵ハ、普賢果ヲ証セシ、女人ヲ捨ル事ナク、初果ノ聖者ノ法ヲ信セシ、夜昼八十度、婬ヲ行セリ。

一角仙人ハ、雨降テ道ノ悪カリケルニ腹ヲ立テ、諸ノ竜王ヲ水瓶ニ狩籠テ置ク程ニ、験ヲ得タリシカ、玉女ノ遊ヲ見テ心移リ、験ヲ失フナリ。

○片仮名古活字三巻本『宝物集』(注8)

三、不邪婬ト申ハ、男ノ持タル女ノ方ヘ目ヲダニモ見ヤルベカラズトテ、セイシテ侍メル。経ノ中ニ多禁メラレタリ。亦、女人モ人ノ男ヲ不可取。此次ニ大方ノ不邪婬戒ノ文ヲ少少可申。女人ハ煩悩ノミナモト也。一度モ犯シツレバ、五百世ノ間、彼ニ随テ六趣ニ輪廻ス。毒蛇ヲバ見トモ女人ヲバ見ルベカラズ。諸婬ハ女人ニ近付ガ故也。相構テ是ヲバ遠ザカルベキ也。

一見於女人　不離三悪道　永結三途業

何況於一犯　定墜無間獄

加様ニアマタノ経ノ中ニ申タルメレバ、増テ著ヲ成サン罪、思ヤリテ知ヌベシ。流転生死ノ業ハ婬欲ニヨル也。春ノ駒ノ身ヲ損シ、秋ノ鹿ノ命ヲ失フモ、唯婬欲ガタブラカス故也。銅ヲ飲ム象、鉄食フ犬、ナヲシ此道ニタヘズ。況ヤ人倫ニヲイテヲヤ。

一角仙人ハ玉女ノ容ニ近付テ験ヲ失ヒ、四目居士ハ臣子ノ命ニシタガヒテ行ヲコタリ、鳩摩羅炎ハ亀茲国ノ王女ニ縁ヲ結ビ、羅什三蔵ハ四人ノ子ヲ設ケキ。大樹仙人ハ女ヲ見テ定ヲ出テ、カサン比丘ハ、優婆堀多ニハカサレ、ケウシカボンジガ不還果ヲ証セシモ、女捨ル事ナク、初果ノ聖ノ法ヲ信ゼシ、夜ル昼ル八十度ノ婬欲ヲ行ジケルトゾ申ケル。

一角仙人ハ、雨ノフリテ道ノアシカリケルニ腹ヲ立テ、諸ノ竜王ヲ水瓶ニカリコメテヲク程ノ験有人ナリシカドモ、玉女ノアソビヲ見テ心還テ験ヲ失ヒケル也。

○久遠寺本『宝物集』巻五（注９）

一角仙人ハ玉女ノ容ニ近付テ験ヲ失ヒ。四目居士ハ呂子ノ命ニシタカヒテ行ヲヲコタリ。鳩麻羅延ハ亀茲国ノ王女ニ縁ヲ結ヒ。羅什三蔵ハ四人ノ子ヲマウケ。大樹仙人ハ女ヲ見テ定ヲ出テ。カサム比丘ハ優ハ掬多ニハカサレタリ。

一角仙人ハ雨ノフリテ道アシカリケルニ腹立テ。諸ノ竜王ヲ水瓶ニカリコメテ置程ノ験アル物。玉女ノ遊ヲ見テ心還リテ験ヲ失フナリ。

○第二種七巻本『宝物集』巻第五（持戒）（注１０）

一角仙人は玉女の容にちかづきて験をうしなひ、四目居士は臣子の命にしたがひて行をおこたる。鳩摩羅衍は、亀茲国の玉女に縁を結び、羅什三蔵は四人の君をまうけき。大樹仙人は女を見て定をいで、かさん比丘は、優婆崛多にはかられて、憍尸迦梵志が不還果を証せし、女人をすつる事なし。初果聖者の法を信ぜし、昼夜に八十度の婬をおこなひき。

一角仙人は、雨のふりて道のあしかりけるにはらをたて、もろ〳〵の竜王を水瓶にかりこめてをくほどの験をすてて、玉女のあそぶをみて心をうつして験をうしなう事也。

以上が『宝物集』諸本に収載された「一角仙人説話」である。諸本を通観すると、片仮名古活字三巻本『宝物集』の冒頭で述べられたように、本話は「持戒」に位置づけられ、五戒の一つである「不邪婬」の例話としてある。まずは、本文の冒頭部分を比較検討をしてみたい。一巻本『宝物集』には、

邪婬ト申シハ女之方ヘ、メヲタニモミヤラストソ申メル。法花経之安楽行品ニ、チカツクマシキ相ヲオシヘ給ヘルニモ、諸ノ婬女ニチカツクヘカラスト侍メル。

とある。冒頭に、「邪婬」と記されているが、諸本では、「不邪婬」に表記が変わる。また、『法華経』安楽行品を引用して、「諸ノ婬女ニチカツクヘカラス」とする点も、一巻本の独自本文といえよう。片仮名古活字三巻本『宝物集』では、

三、不邪婬ト申ハ、男ノ持タル女ノ方ヘ目ヲダニモ見ヤルベカラズトテ、セイシテ侍メル。経ノ中ニ多禁メラレタリ。亦、女人モ人ノ男ヲ不可取。此次ニ大方ノ不邪婬戒ノ文ヲ少少可申。女人ハ煩悩ノミナモト也。一度モ犯シツレバ、五百世ノ間、彼ニ随テ六趣ニ輪廻ス。毒蛇ヲバ見トモ女人ヲバ見ルベカラズ。諸婬ハ女人ニ近付ガ故也。相構テ是ヲバ遠ザカルベキ也。

と記している。このように、男性が女性を見ることを禁じ、女性を犯すことで五百世の間に六道に輪廻することから、女性に近づかないように戒めている。この箇所は諸本によって本文の異同がある。並べて比較してみると、つぎのようになる。

○一巻本

邪婬ト申ハ女之方ヘ、メヲタニモミヤラストソ申メル。

○片仮名古活字三巻本

不邪婬ト申ハ、男ノ持タル女ノ方ヘ目ヲダニモ見ヤルベカラズトテ、セイシテ侍メル。

○身延文庫本

第三ニ、不邪婬ト申ハ、妻アル者ヲ夫ニセス、夫アル者ヲ妻ニセスト誡タル也。サレトモ、是ハ一人ヲハユルサレテ侍メレハ、事モ踈ニテ侍メル。不婬トハ、ヒトシキ女ノ方ヘ目ヲモ見遣ヘカラスト、アマタノ経ノ中ニ、制シテ侍メリ。

○第二種七巻本

第三に、不邪婬と申は、妻のあるをも夫とせず、夫のあるをも妻とせずいましむるなり。されども、これ一人をゆるされて侍るめれば、事もおろかに侍るめり。不婬とて、女のかたへ目をもだにみやるべからずと、あまたの経の中に制しいましめられて侍るめり。女人は煩悩の源、一度も犯しつれば、五百世の間、かれにしたがひて六趣に輪廻す。又は、毒蛇はみるとも女人はみるべからず。

諸本を比較すると、①女性の方に目でみることさえ禁止する内容、②妻と夫の夫婦が、両者でない者と邪な関係を持つことを誡める内容、に分けることができよう。ちなみに、身延文庫本の「妻アル者ヲ夫ニセス、夫アル者ヲ妻ニセスト」いう内容は、『新古今和歌集』一九六三に「不邪婬戒」の題で「さ

らぬだに重きが上に小夜衣わがつまならぬつまな重ねそ」とある歌が参考になるだろうか。歌意は、「そうでなくて、自分の妻でさえ罪が重いのに、その上にさらに、自分の妻でない妻と関係を重ねるな」とある（注１１）。

ちなみに、この点について前掲の前田氏は、（平間注：第二種七巻本『宝物集』では）「「一人」となら「ゆるされて」いるからと「不姪」、即ち、女性への関心の断絶を説く形に転換し尖鋭化する」と指摘している（注１２）。そして『宝物集』は、一角仙人以外の不邪姪の例話を挙げていくのである。

ところで、本説話の構成に注目すれば、『類雑集』の本文と比較検討すると、『宝物集』には、大幅な省略が認められるうえ、片仮名古活字三巻本『宝物集』以降の諸本において、他の作品には見られない独自本文を有する点が注目されよう。具体的には、一角仙人が、雨が降って道が悪いことに腹を立て、その原因である「諸の竜王」を水瓶に閉じこめておく験を持っていたが、玉女が遊ぶ姿をみて心をうつしたためにその験を失った点について、仙人としての験が、段階を経て失われたことが記されている。ここにあげた『宝物集』の本文に注目すると、「雨と竜王の関係」や「玉女」の存在が、看過できない語句であると思われる。若干、脇道に逸れるが、いま先行研究に従ってその用例などを整理しておきたい。

三‐一「玉女」について

田中貴子氏は、文献資料における〈玉女〉の展開について重要な指摘を発表されている（注１３）。

たとえば、親鸞の「行者宿報偈」や、真言僧覚禅（康治二年〈一一四三〉生）の図像学書『覚禅鈔』の一節に注目されている。いま必要な箇所を、引用してみたい。なお、書き下しは、田中氏の論文による。

○『親鸞夢記』『三夢想記』に含まれる「行者宿報偈」

親鸞夢記に云はく

六角堂救世大菩薩、顔容端政之僧形を示現して、白納の御袈裟を着服せしめて、広大の白蓮に端座して、善信に告命して言はく、

行者宿報にて設ひ女犯すとも
我玉女身と成りて犯せられん
一生の間能く荘厳して
臨終引導して極楽に生ぜしめん

救世大菩薩此の誦して言はく、此の文は吾が誓願なり、一切群生に説き聞かすべしと告命したまへり。斯の告命に因て、数千万の有情にこれを聞かしむと覚えて、夢さめおはんぬ。

○『覚禅鈔』

本尊の玉女に変ずる事

又云はく。邪見心発り。婬欲熾盛にして世に堕落すべきときは。如意輪我が王の玉女と成り。其人の親しい妻妾と為りて共に愛を生じ。一期生の間。福冨を以て荘厳し。無辺の善事を造ら令め。西方極楽浄土に仏道を成さ令む。

（『大正蔵』図像部第五巻）

以上の資料について、氏は、

鎌倉時代までに、特に密教色豊かな土壌で培われてきた如意輪観音に関する伝承を背景に持ち、女犯という主題に即して蓋然的に浮上したものだということを物語っている。

としたうえで、

（平間注：親鸞の）「行者宿報偈」の玉女という表現が、『覚禅鈔』そのものの記述に直接依拠したわけではないにしろ、鎌倉時代、玉女なるものが如意輪観音（または救世観音）の変化身の一つと考えられていたのは明らかである。『覚禅鈔』でも「行者宿報偈」でも、玉女は、男性の婬欲を我が身で受けとめることによって、仏教では本来罪業であるはずの婬欲を転化し、極楽往生の機縁とする役割を担っている。いわば、玉女は男性の罪業を肩代わりするものとして、一般に女性の往生を認めていない仏教の制度の中に位置づけられているといえる。

と指摘されている（注１４）。

これら二点の資料はともに、救世観音または如意輪観音が、仏道修行を行う者が、たとえ女性を犯しても、玉女となって女性の身に代わることを述べ、最終的には、行者を極楽に往生させることができるという内容となっている。換言すれば、本尊の救世観音（如意輪観音）が「玉女」の姿となり、婬欲や邪見な心を起こした者でも、極楽に導く役割をはたしている。

一方、『宝物集』に引用された「玉女」は、「玉のように美しい女」を意味していて、その「容（かたち）」を目の当たりにした一角仙人は、仙人としての験を喪失してしまうくだりとなっている。第二種七巻本『宝物集』の注によれば、『宝物集』は、『横川首楞厳院二十五三昧式』の「一角仙人猶墮玉女之容。四目居士自隨從子之眼。飲銅之象乍入欲火之迷。飡鐵之狗終出愛水意」（『大正蔵』八四巻、八七七ｂ二～四）のくだりと一致する語句が多く、本書に拠ったものと指摘されている（注１５）。

ここに挙げた資料はいずれも、一二〇〇年前後に成立し、なおかつ「玉女」が物語のなかで重要な役割を果たしている。ただし、玉女の役割が、①（『親鸞夢記』などでは）仏道修行に向かわせる存在、②（『宝物集』では）修行で得た力を失わせる誘惑となる存在、と大きく異なることは、看過できない点であろう。『大智度論』や『類雑集』では、「姪女」の「扇陀」に誘惑された一角仙人であったが、『宝物集』では、なぜ、「玉女」と記されるようになったのであろうか。そもそも、「玉女」とは、どのような存在であるのか、先述の田中氏の論を参照していきたい。

田中氏によれば、玉が王権のシンボルであるように、玉女も王の霊力を補充した存在であり、玉女が王と婚姻関係などの性的接触を持つことを指摘されている。また、玉や王権との関連を示す初出は、『三宝絵』と考えられている。氏の指摘に従い、『三宝絵』の用例を確認してみよう。『三宝絵』巻上・四「精進波羅蜜」に、王子の大施太子が富貴を生み出す如意宝珠を求めて竜王の竜宮へ旅立つという話の、太子が苦難を乗り越え、ついに竜王の宮の門にたどりつく場面に記された一文に注目したい。

王の宮に至りて見れば、毒の竜掘を守り、玉の女門を守る。（注１６）

右にあげた一文は、漢字平仮名交じり文で表記された観智院本で、傍線部には「玉の女」とあるが、前田本には「玉女」、関戸本には「玉ノ女」とある。そして典拠である『大唐西域記』巻三の対応箇所には、「竜女」と記されていることから、この女性が、「如意宝珠を守る竜王の娘」であると、田中氏は論じられている（注１７）。『宝物集』では、玉女に誘惑された一角仙人が、雨をふらせて道を悪くした竜王を水瓶にとじ込める描写がある。ここでの竜王は、雨をつかさどる存在である。ここまで「玉女」という語句に注目してきたが、その用例を整理すると、つぎの三点となろう。

①『親鸞夢記』などでは、観音が「玉女」の姿となり、たとえ修行者が女犯をおかしても、「玉女」は観音であるから、西方極楽浄土の仏道修行に進むことができる。

②『三宝絵』に描かれた竜王は如意宝珠（＝玉）を守る存在であり、それゆえに「玉女」という呼称が用いられた。

③『宝物集』の一角仙人説話では、仙人を誘惑する美女として玉女が登場し、玉女に近づいたために、仙人としての験を失う。また、仙人が雨が降り道が悪くなることに腹をたて、（雨をつかさどる）竜王を水瓶に閉じ込める験を持っていたが、玉女の遊びをみて験を失った。

ここにあげた三点のうち、②と③、すなわち『三宝絵』や『宝物集』では、「竜王」「宝珠」「玉女」という語句が共通することは、偶然ではないことが考えられるだろう。この点について考えをめぐらせると、つぎにあげる藤巻和宏氏の御指摘が重要となるだろう。

藤巻氏は、勧修寺の寛信、あるいは随心院の親厳が作者と比定されている『東要記』巻中「精進峰」の記述に注目され、その思想内容について、

転輪聖王と龍王とがそれぞれ持つ宝珠によって福徳がもたらされるという思想を『遺告二十五箇条』に記される空海所伝の宝珠に重ね合わせ、空海の力によって宝珠が恵みの雨をもたらし、龍王の宝珠も力を発揮すると捉える。また、龍王がこの宝珠を守護することで、両者の力により悟りの境地を得ることが可能となる。それゆえ空海は、各地をめぐって龍王の棲む峰を探し、土心水師の修行する室生山にこれを埋めた。密教と国家の繁栄は、この宝珠により保証されているという内容である。

と指摘されている（注１８）。一角仙人説話に、「如意宝珠」の語句は記されないが、本説話の「玉女」

の語句に注目し、その用例には、「竜王（龍王）」「雨」「玉女」が共通して登場するのである。これらが描かれる作品の背景と、藤巻氏が指摘するところの福徳をもたらす如意宝珠が、恵みの雨をもたらし、龍王が宝珠を守護することで悟りの境地を得ることができるという思想信仰は、相互に重なりあうものではないだろうか。この思想信仰は、平安時代の作品理解において極めて重要なものであると考えられよう。

三-二『三国伝記』の一角仙人説話について

つぎに、『三国伝記』と『三国伝記抜書』を取り上げる。

○『三国伝記』巻第二　第二十八「一角仙人事」　明ニ〔伉〕儷ノ昵深事ニ也（注１９）

梵曰過去久遠昔、波羅奈国山中ニ仙人有。頭一角生。仍名ニ一角仙人ト。十八大経ヲ習ヒ坐禅シテ四無量心ヲ覚リ。　五神通ヲ得タリ。彼ノ国ニ婬女有リ。名ヲ扇陀ト云フ。端正ニシテ双ビ無シ。五百美人ヲ眷属トス。各々車ニ乗リ美酒好食幷ニ歓喜丸ヲ調テ彼ノ山中ニ遊ブ。其時、一角仙人是レト共ニ遊戯ゲス。遂ニ良薬ヲ嘗ナメテ美酒ヲ呑ム。諸ノ婬女ト遊戯ユゲ逍遥セウヨウスル程ニ、欲境ノ心発リテ婬愛ニ及、伉儷〔ノ人の昵ビ〕有リ。其時ノニ神通ヲ退失スト云ヘリ。昔ノ一角仙人ハ今ノ釈迦如来レ是也。〔昔の〕扇陀婬女ハ今日ノ耶輸

多羅是也。夫婦ハ五百生ノ縁ト経ノ中ニ説ケル、是以テ為レ証也。

○『三国伝記抜書』〈身延文庫本〉第三十九（注２０）

一、一角仙人事

梵云、久遠ノ昔、ハラ奈国ノ山中ニ有二仙人一。頭ニ生二一角一。仍爾カ名也。深ク有渉、定ヲ凝テ、得二五神通一。彼国ニ有二姪女一。名ニ扇陀一。端正無双也。五百人ノ美人ヲ具シテ乗レ車ニ、調ヘテ二美酒好食一ヲ、遊フ二彼山中一ニ。仙人見テ之一共ニ遊戯ス。嘗ナメ二良薬一ヲ、呑ミ二美酒一ヲ、姪女ト遊ケルニ発ヲコリ二欲心一ニ、及フ二姪愛一ニ。有リカウレイノムツヒ二伉儷一。軈テ神通ヲ失ヌ。昔ノ一角仙人ト者、今ノ尺尊、是也。姪女ノ扇陀ト者今ノ耶輸多□女也云々。（傍線部分は、独自文。）

以上が、『三国伝記』と『三国伝記抜書』の一角仙人説話である。『三国伝記』の出典について、「本話は個々の表現では、『法苑珠林』に最も近いが、筋は大幅に簡略化されており、直接関係の有無は断定できない」との指摘がある（注２１）。しかしながら、『大智度論』や『法苑珠林』の本文を参照したと考えられる『類雑集』とも共通する語句が確認できる。たとえば、一角仙人は、今の釈尊で、美女・扇陀が、今の耶輸多羅（耶輸多羅の女）とする点である。人名以外で共通する語句には「歓喜丸」がある。ちなみに、『三国伝記』の補注に「歓喜丸」について、

歓喜団ともいう。もとインドの菓子であるが、わが国では歓喜天と双身毘沙門天に限った供物とされる。蘇・蜜や各種の穀類や薬種を和してつくった餅菓子状の食べ物。歓喜天は聖天ともいい、わが国では夫婦和合の神として信仰される。

と指摘されている（注２２）。一方、『宝物集』の諸本とは、かなり離れた文脈となっていることがわかる。『類雑集』と『三国伝記』の両作品における影響関係についての検討は、早急に結論を出すことができないが、現段階で考えられる可能性を述べておくとつぎのようになるだろう。

前田氏は、『三国伝記』のなかで、現存最古とされる『三国伝記抜書』（天文五〈一五三六〉年）について、

（平間注：身延本は）かなり合理化されている。どちらか（平間注：写本刊本と身延本）原形に近いかは、俄かに決め難いけれども、説話の源泉である『大智度論』（『法苑珠林』）をみると、写本刊本の方がより忠実である。しかし、より漢文に近い表記は身延本の方なので、身延本の依拠した資料（黒田によれば、日意所持本）では、傍線部分（平間注：独自本文部分）もどうなっていたか不明であり、原形にこだわる議論は判断停止せざるをえない。やはり黒田が指摘するように「本文の点でも、写本刊本とは聊か系統を異にする、極めて注目すべき資料」と今のところは考えた方が無難である。

と述べている（注２３）。この『三国伝記抜書』が日意（一四四四～一五一九、久遠寺第一二世）所持本であるならば、同様に、久遠寺をはじめとする日蓮宗寺院での成立が認められる『宝物集』や『類雑集』との影響関係も想定できないだろうか。この点についても、本研究会の今後の課題として準備を進めたい。

三-三『太平記』の一角仙人説話について

最後に、『太平記』の一角仙人説話を取り上げたい。

○『太平記』巻三六「一角仙人の事」（注２４）

また昔、天竺の波羅奈国に一人の仙人あり。小便をしける時、鹿のつるびけるを見て、婬欲の心発しければ、覚えずして精を漏したりけるが、草の葉にぞかかりたりける。その草の葉を一の妻鹿食ひて、子を生ず。形は人にして額に一つの角ありければ、人これを一角仙人とぞ申しける。修行功積つて、神通殊に新たなり。ある時山路に雨降りて、松のしづく、苔の露、石巌滑らかなりけるに、この仙人谷へ下るとて、すべつて地にぞ倒れける。仙人腹を立てて、竜王があればこそ雨もふらせ、雨があがればこそ我はすべつて倒れたれ。如かじ、この竜王どもを捕へて禁楼せんにはと思ひて、外八海の間にあらゆる所の大竜・小竜どもを残らず捕へて、岩ほの中にぞ押し籠めける。これより国土に雨を降らすべき竜神なければ、春三月より夏の末に至るまで、天下大いに旱魃して、山田のさ苗さながらに、とらでその儘枯れにけり。

君遥かに民の愁へを聞し食して、「いかがしてこの一角仙人の通力を失ひて、竜神を岩の中より出だすべき」と問ひ玉ふに、ある智臣申しけるは、「かの仙人たとひ霞を飡ひ気を飲みて、長生不老の道を得たりとも、十二の観に於いていまだ足らざる所あればこそ、道にすべりて瞋る心はありつらめ。心い

まだ枯木死灰の如くならずは、色に耽り香に染む愛念なからんや。しからば三千の宮女の中に、容色殊に勝れたらんを、一人かの草庵の中に遣はされて、草の枕を並べ苔の筵を共にして、夜もすがら蘿洞の夢に契りを結ばれば、などかかの通力を失はで候ふべき」とぞ申しける。

君、「然るべし」と仰せられて、すなはち三千第一の后、扇陀女と申しけるに、五百人の美女を副へて、一角仙人の草庵の内へぞ送られける。后はさしもいみじき玉の台を出でて、見るも悲しげなる草庵に立ち入り玉へば、苔漏るしづく袖の露、かわく間もなき御泪なれども、勅なれば辞するに言なくして、十府のすがごも敷き忍び、小鹿の角のつかの間も、千年をかねて契り玉ふ。仙人も岩木にあらざれば、あやなく后に思ひしみて言の葉ごとに置く露の、あだなる物とは疑はず。それ仙の道は露盤の気を嘗めても、婬欲に染みぬれば、仙の法皆尽きて、そのしるしなし。さればこの仙人、一度后に落されけるより、鯤垣の審も破れて、通力もなく、金骨返りて本の肉身と成りしかば、仙人忽ちに病衰して、軈て空しく成りにけり。その後、后は宮中へ立り帰り、竜神は天に飛び去りて、風雨時に随ひしかば、農民束作を事とせり。

以上が、『太平記』の一角仙人説話の本文である。『太平記』の本説話の特徴を簡略に紹介したい。本話は、『類雑集』の一角仙人話の大まかな流れは汲んでいるものの、さまざまな異同が認められよう。例えば、一角仙人が雨で足を滑らせた原因は、「竜王ども」が雨を降らせたせいだと腹をたてて、岩のなかに閉じ込めるくだりである。ここには、『宝物集』と同様に「竜王」が登場する点では共通しているが、『太平記』の方が、一読して意味が通じるようになっている。

また、君主が竜王（＝竜神）を岩の中から出そうとする時に、知恵のある臣下が、

「かの仙人たとひ霞を飡ひ気を飲みて、長生不老の道を得たりとも、十二の観に於いていまだ足らざる所あればこそ、道にすべりて瞋る心はありつらめ。心いまだ枯木死灰の如くならずは、色に耽り香に染む愛念なからんや。しからば三千の宮女の中に、容色殊に勝れたらんを、一人かの草庵の中に遣はされて、草の枕を並べ苔の筵を共にして、夜もすがら蘿洞の夢に契りを結ばれば、などかかの通力を失はで候ふべき」

と答えたくだりがあるが、その前半に「霞を食べ空気を飲んで」とあるのは、『荘子』逍遥遊にある「藐古射之山ニ有テ神人一居焉、…不レ食ハ五穀ヲ一数吸ヒヲ風飲ミレ露ヲ、乗ニ雲気ニ御ニ飛竜ニ一、而遊ブ乎四海之外ニ」の一文によるものであると指摘があるが（注２５）、こうした記述も仏典類や『類雑集』『宝物集』『三国伝記』には確認できない。またこのくだりの後半にある「蘿洞の夢」については、『和漢朗詠集』下・仙家五五二「夢を通するに夜深けぬ蘿洞の月　跡を尋ぬるに春暮れぬ柳門の塵」の和歌を下敷き（引き歌）としていることが指摘されている（注２６）。このように、『太平記』の一角仙人話では、それまでの仏書・文学作品とは異なる表現をくわえて、広がりのある説話となっていることがうかがえる。

四、おわりに

最後に本報告のまとめと今後の課題について言及しておきたい。

本説話は、第二章冒頭で紹介した前田氏の詳細な論考によってほぼ言い尽くされた感があるが、『類雑集』にも収載されていることを確認してから、『類雑集』における「一角仙人説話」の系統が、研究

会において話題となった。そこで本研究に取り組むことになった訳であるが、本説話の考察は『類雑集』の成り立ちを知るうえでも、重要である。はじめに、『類雑集』の書き下しを試みたが、『類雑集』の本文は意味不通の箇所も多く、『大智度論』や『法苑珠林』で補うことでその内容を知ることができる。これは、『類雑集』が版本となる際に、酷似した文字を誤読したり、誤植したことによるものと考えられよう。本文自体は、『大智度論』『法苑珠林』と大きく変わることはないが、若干の異同は、認められる。

本報告では、『類雑集』の「一角仙人」の資料紹介や、『宝物集』の諸本の比較検討が主となり、文字通り、現時点での「中間報告」となっている。わずかではあるが、本稿で指摘した点はつぎのとおりである。

『類雑集』巻八には、「一角仙人」と「術婆伽」説話のくだりが連続しているが、両説話は、『宝物集』においても、同じ巻の持戒に位置づけられている。また、両説話はともに『大智度論』や『宝物集』にもあることから、両書との比較検討をとおして、『類雑集』の書承関係の分析をすすめることが可能となる。本稿では以上のような観点に立って、若干の考察を試みた。論旨が多岐に渡ったので、「玉女」の用例とその結果についてのみ、再度まとめておきたい。

先述の田中氏の論文によれば、「玉女」の初例は、『三宝絵』となり、また僧侶の夢記などに用例が認められる。今回、取り上げた「玉女」は、つぎの三点に分類できる。

①『親鸞夢記』などでは、観音が「玉女」の姿となり、たとえ修行者が女犯をおかしても、「玉女」は観音であるから、西方極楽浄土の仏道修行に進むことができる。

②『三宝絵』に描かれた竜王は如意宝珠（＝玉）を守る存在であり、それゆえに「玉女」という呼称が

用いられた。

③『宝物集』の一角仙人説話では、仙人を誘惑する美女として玉女が登場し、玉女に近づいたために、仙人としての験を失う。また、仙人が雨が降り道が悪くなることに腹をたて、（雨をつかさどる）竜王を水瓶に閉じ込める験を持っていたが、玉女の遊びをみて験を失った。

以上のうち、②『三宝絵』と③『宝物集』では、「竜王」「宝珠」「玉女」という語句が共通することは偶然ではないと考えると、藤巻和宏氏の龍王と如意宝珠に関する指摘が興味深いものとなってくる。氏は、『東要記』巻中「精進峰」の思想内容について、

転輪聖王と龍王とがそれぞれ持つ宝珠によって福徳がもたらされるという思想を『遺告二十五箇条』に記される空海所伝の宝珠に重ね合わせ、空海の力によって宝珠が恵みの雨をもたらし、龍王の宝珠も力を発揮すると捉える。また、龍王がこの宝珠を守護することで、両者の力により悟りの境地を得ることが可能となる。それゆえ空海は、各地をめぐって龍王の棲む峰を探し、土心水師の修行する室生山にこれを埋めた。密教と国家の繁栄は、この宝珠により保証されているという内容である。

という指摘をされている。一角仙人説話には、「如意宝珠」の語句は記されないが、「玉女」という語句の用例を通して、作品を通観すると、「竜王（龍王）」「雨」「観音」「玉女」が共通して登場するのである。

こうした作品の思想信仰は、藤巻氏が指摘する福徳をもたらす如意宝珠が、恵みの雨をもたらし、それを守護する龍王（や玉女）が宝珠を守護するという思想信仰と重なり合うものといえよう。また、このような思想信仰が、平安時代の作品を理解するうえで、極めて重要なものとなってくるのである。

また、『宝物集』と『類雑集』はともに日蓮宗寺院での成立や所蔵が認められる作品である。そのことを念頭におけば、本稿でとりあげた身延山久遠寺本『三国伝記抜書』の存在は、興味深いものとなってくる。本書の考察は今後の課題の一つとなる。

現時点では、『類雑集』と『宝物集』と『三国伝記』の関係について言及することはできないが、次号をもって、『類雑集』における「一角仙人」説話の出典研究を補完できるよう準備をすすめたい。

注

（1）大正大学図書館所蔵、慶安四年版『類雑集』による。翻刻は『大正大学綜合佛教研究所年報』第四〇号、平成三〇年、五七～六〇頁。

（2）拙稿「術婆伽説話の生成と展開――恋は病か、破戒か、神を招くか――」高橋悠介編『宗教芸能としての能楽』勉誠出版、令和四年。

近世唱導文芸研究会「『類雑集』の出典その（1）――「術婆伽」説話を手がかりに――」『大正大学綜合佛教研究所年報』第四三号、令和三年、一～二三頁。なお、論述の都合上、一部、本稿と重複する内容があることをお断りする。

（3）牧野和夫『中世の説話と学問』和泉書院、平成三年、一八〇～一八一頁。

（4）前田氏の論文の出典一覧はつぎのとおりである。

①「一角仙人物語の構造と展開（1）――マハーバーラタ所収話の構造――」文藝と批評の会 編『文芸と批評』第五巻6号、昭和五六年。

②「一角仙人物語の構造と展開（2）――仏教所収話群の諸相と構造――」文藝と批評の会 編『文芸

と批評』第五巻８号、昭和五八年。
③「一角仙人物語の構造と展開（３）――中国世界の受容をめぐって――」文藝と批評の会 編『文芸と批評』第五巻９号、昭和五八年。
④「一角仙人物語の構造と展開（４）――日本における受容と表現（一）『今昔物語集』所収話の世界と言語――」文藝と批評の会 編『文芸と批評』第六巻７号、昭和六三年。
⑤「一角仙人物語の構造と展開（５）――日本における受容と表現（二）古代～中世における歌学書の受容をめぐって――」『東京女子学館短期大学紀要』第１２輯、平成二年。
⑥「一角仙人物語の構造と展開（６）――日本における受容と表現（三）中世における説話集・仏書の受容をめぐって――」『東京女子学館短期大学紀要』第１６輯、平成六年。
（５）前田氏前掲注（４）⑥に同じ、一八頁。
（６）月本直子・月本雅幸編『宮内廳書陵部蔵本　宝物集総索引』古典籍索引叢書　第六巻（第一回配本）汲古書院、平成五年。
（７）黒田彰編『身延文庫蔵宝物集中巻』和泉書院、昭和五九年、一三五頁。
（８）山田昭全・大場朗・森晴彦『宝物集』おうふう、平成九年、一三〇～一三一頁。
（９）小泉弘編『古鈔本　寶物集』（貴重古典籍叢書８）角川書店、昭和四八年、影印四〇七～四〇八頁。なお、本文の翻刻は筆者が行なった。
（１０）『宝物集　閑居友　比良山古人霊託』新日本古典文学大系４０、岩波書店、平成五年、二〇七～二〇八頁。
（１１）『新古今和歌集』新編日本古典文学全集４３、小学館、平成七年。

（１２）前田氏前掲注（４）⑥に同じ、三〇～三一頁。
（１３）田中貴子『外法と愛法の中世』平凡社ライブラリー、平凡社、平成一八年、八〇～一二一頁。
（１４）田中氏前掲注（１３）に同じ、八一～八三頁。
（１５）前掲注（１０）に同じ、第二種七巻本『宝物集』二〇六頁、脚注八参照。
（１６）『三宝絵　注好選』新日本古典文学大系３１、岩波書店、平成九年。前田氏前掲論文、注（４）⑥、三二～三三頁。
（１７）田中氏前掲注（１３）に同じ、九〇～九二頁。
（１８）藤巻和宏『聖なる珠の物語――空海・聖地・如意宝珠』平凡社、平成二九年、六六～六八頁。
（１９）池上洵一校注『三国伝記』（上）中世の文学、三弥井書店、平成九年、一五二～一五三頁。
（２０）黒田彰編『古典文庫』四六一冊、昭和六十年、九八、九九頁。
（２１）注（１９）に同じ。
（２２）注（１９）に同じ、三六〇頁。
（２３）前田氏前掲論文注（４）⑥、一八～二二頁。
（２４）長谷川端校注・訳『太平記』４、新編日本古典文学全集５７、小学館、平成一六年第三刷、二七〇～二七二頁。
（２５）『老子・荘子』上巻「逍遥遊第一」、新釈漢文大系第七巻、明治書院、昭和五五年、一四五頁。
（２６）菅野禮行校注・訳『和漢朗詠集』、新編日本古典文学全集１９、小学館、平成一一年、二九一頁。